

【 論文 】

## 禅における再帰性—井上円了の禅解釈

ラルフ・ミュラー (Ralf MÜLLER)

明治の哲学者、井上円了(1858-1919)の名前はよく知られているが、その思想が研究の対象となってきたのは1990年代の後半からである。円了の思想の出発点は哲学だが、東洋の伝統、特に仏教の諸々の宗派も研究していた。円了によれば、禅仏教は一般には修行に注目するとされていることが多いが、哲学と共通基盤をもっている。それは真理への探求である。本発表は、円了の思想を手がかりに、禅宗における真理への探求の方法を主題とする。

問題の範囲を限定するために、真理への探求の独特な構造である「再帰性」に注目したい。「再帰性」とは、ある物ないし事が自らに関係することを指す。自己反省も自己意識も再帰的である。哲学は真理への探求のあり方そのものを反省する点で再帰的である。哲学の場合は、テキストが再帰性の媒体である。なぜなら、哲学はテキストをもって反省したことを、自らの鏡にもう一度映し、描写し、再現前化するからである。再帰性は、映された物・事としての対象レベルと映す物・事としてのメタレベルの二面をもつ。

筆者が円了の禅思想の解釈において「再帰性」に注目する理由は二つある。一つは思想史的理由であり、もう一つは哲学的理由である。第一に、歴史的に見れば禅の研究者として余り認められていない哲学者である円了は、従来ほとんど忘れられてきた禅宗のテキストの独特な「再帰性」の性格を発見した人物であると考えられるからである。第二に、円了は禅を哲学的な立場から取り扱っているが、「再帰性」

はまさに主に哲学と関わっているためである。

本論文は次の問いを議論する。哲学の再帰的性格と禅の再帰的性格はどのように関わるのであろうか。禅の場合は、その再帰的なテキストがあるか。再帰性のアナロジーがあるか。その再帰性の対象レベルとメタレベルがあるか。以下に詳しく示すとおり、筆者はこれらの問いに肯定的に回答する。なぜなら、禅におけるその再帰性を実現するテキストジャンルがあるからである。特に公案集とその叙述である『洞山五位』などはそのテキストジャンルの一例である。公案集は禅の再帰性の対象レベルを表し、公案を註釈する『洞山五位』は、そのメタレベルを表している。

今後の議論は次の五節に分かれている。

1. 井上円了から見た仏教における禅の位置
2. 井上円了から見た禅と哲学の関係
3. 禅の再帰的叙述の対象レベルは何であるか
4. 禅の再帰的叙述のメタレベルは何であるか
5. 禅の再帰性の境界線

## 1. 井上円了から見た仏教における禅の位置

井上円了の禅宗の扱いは、彼の日本の哲学に対するもっとも偉大な貢献としてみなしてよいものである。日本哲学の歴史的起源はヨーロッパ哲学だけでなく、東アジアの諸伝統にもある、と円了は言う。円了の業績によって禅は、日本の哲学の歴史に登場したのである。

円了は当初、仏教、特に中国仏教の教学をとりわけ重要視していた。彼は、俱舎宗・成実宗・法相宗・三論宗・華嚴宗・天台宗<sup>1</sup>といったさまざまな仏教宗派を扱った。大乘と小乗の伝統的な区分に代えて、円了はこれらを「理論 [に基礎をおく] 諸宗派」として分類する。理論に基礎をおく諸宗派と経験に基礎をおく諸宗派とは、それぞれ「理宗」と「通宗」と呼ばれる。他の文献においては、円了は「理論宗」と「實際宗」という用語を用いている。(ゴダールはこの分類を考慮に入れず、円了がどのように理論に基礎をおく諸宗派を分類したかを説明している<sup>2</sup>。つまり、「1) 俱舎宗：存在についての宗派。2) 成実宗：空の変形としての存在についての宗派。

3) 法相宗：存在の変形としての空についての宗派。4) 三論宗：空の変形としての空についての宗派。5) 華嚴宗と天台宗：中についての宗派」)

その後、円了は、日本に広まった宗派、つまり真宗・日蓮宗・禅宗の研究に専念した。1890年台の初頭に、円了の研究は、これら諸宗派それぞれの哲学に焦点をあてた三冊の書物に結実した。それらの出版物の中で最後ものは、『禅宗哲学序論』<sup>3</sup>と題されており、1893年(明治26年)に公表された。三つの宗派はすべて「経験に基礎をおく諸宗派」に分類される。この分類の通り、真宗・日蓮宗・禅宗の三宗派は経験を重視しているため、理論に基礎をおく諸宗派より哲学から離れた仏教の宗派であるといえる。それゆえ、円了は経験派の三宗を一番最後に取りあげたのではないだろうか。

円了は、経験に基礎をおく諸宗派を分類することに取りかかるが、彼によればそれら諸宗派は、それぞれ特定の人間の能力に関係した特定の種類の実践を備えている。つまり日蓮宗の実践は智に、真宗の実践は情に、禅宗の実践は意に関係している(cf. IES 6: 293)。円了は、禅宗と意との関係が、実践を精神的肉体的に耐えるために必要とされる修行者の自己鍛錬に基づくとする(cf. IES 6: 297)。実践の主な手段は、瞑想と公案の実践である。にもかかわらず、円了によれば、禅宗はすべての仏教宗派に共通する、一つの本質的な特徴を備えている。その特徴とはつまり真理の探求であって、円了の興味を最も駆り立てたものである。

## 2. 井上円了から見た禅と哲学の関係

円了の禅に関する主な業績は、禅の言語使用とその様々な局面に彼が哲学の観点から焦点をあてたことである。このことは、円了の形式的な記述、即ち言語の取り扱い方のみならず、禅の実践的関心に関する彼の解釈にも当てはまる。なぜなら、円了によればすべての仏教宗派はある目標のために、言語を特別な方法で取り扱っているからである。その目標とは、仏教の真理(真如)あるいは法の本質(法性)に対応するものであり、それを円了は「理想」と呼ぶ。

より一般的な言い方では、いかなる宗教的あるいは哲学的道程も「理解することのできない本質」あるいは「計り知れないもの」(「不可思議の体」)を

目標とする。仏教における法性がこの目標を意味するのとまさに同様に、円了の純粹哲学における理想もこの目標である。彼は「宇宙は一大哲学にして、哲学は一大宇宙なるを知るべし。宇宙の靈妙は哲学の中に開き、哲学の靈妙は宇宙の上に発するなり」(IES 6:283) と述べる。哲学にとって世界は無限な何ものかのままであるが、しかしそれは「可知的より不可知的に向かつて進まんとする」(IES 6:285) のである。

禅宗も無限なものへ関係しているものの、しかし採られた道は哲学が旅するそれとは異なっている。禅にとって無限のものとの関係は直接的である、つまり可知・既知の世界によって仲介されるものではなく、むしろ個人の主観性の基盤を通して、媒介するものがない仕方においてあるのである。それが、禅宗の実践を通して育まれる必要があるところの、理想に接近する道筋である。円了は次のように述べる。「心底最も深き所、一条の暗渠ありて理想の源泉と通ぜざるべからず。しかるにこの暗渠を開ききたりて、ただちに理想の本色真相を啓発するものは、ひとり禅宗あるのみ」(IES 6:279)。禅には理想への直接的な関係があるという事実にもかかわらず、この円了の引用は、なぜ禅と哲学のあいだには、「不思議」あるいは完全に理解することのできないことについて共通のものがあるのか、ということの説明している。

換言すれば、彼はどのようにして禅宗の哲学を考えることができるのかということの説明する。円了は禅においてはたらく哲理を叙述すれば、禅宗の哲学をも描くことが可能になると主張する。その為に、彼は『序説』の冒頭の一節に次のように述べる。「余禅宗を知らず、あに禅学を知らんや。ただその一種異風の宗旨なるを知る。近頃二、三の書についてその大意をうかがうに、高妙の哲理を含有するをみる。今その理を開示し、題して禅宗哲学と名付く、なお禅宗の哲理というがごとし」(IES 6: 249)。

### 3. 禅の再帰的叙述の対象レベルは何であるか

禅の哲学があるならば、その場合には多くの問いが回答されねばならない。その問いとは、すなわち以下のようなものである。どのように円了は禅の実践的要請に沿って理論的な哲理を適合させたのか。そのことによって円了は、禅が記述による

伝承と記述一般に対して批判的な立場をとっていたことを、どのように承認できたのか。禅の哲学と教外別伝はどのような関係にあるのか。

こうした問いに答えれば、禅における再帰性の対象レベルが見えてくるはずである。そして、哲学に相当する原理が禅の中に発見出来れば、禅を哲学することのみならず、禅の中の自己反省や自己叙述が可能になる。

まず、円了は禅の実践的な諸特性に注目する。「[理想界への頓入]を教外別伝とす。[…]その極趣真味は実に文句思議の外にありて、千言万慮を尽くすもなおその一斑を形容すべからずといえども、言亡慮絶の間自ら心月の円照独朗するをみる。

[…]これを禅宗にては本来の面目あるいは本地の風光を開現すという」(IES 6: 278-279)。それに加え、円了は自らの企てが直面する批判を予期してもいた。すなわち「余かくのごとく論じきたらば、禅門にあるもの必ず言わん、禅宗は教外の別宗なればもとより哲学にあらず、もし哲理をもってその宗意を講究するに至らば、これ禅宗にあらずと」(IES 6: 281)。この批判に反論して、円了は禅の哲学が、経験を積んだ禅の実践者の権威の視点から議論するものではないことを明らかにする。にもかかわらず、円了は、禅の哲学がこの禅の実践者の内的観点が「禅が結び付けられた哲理である」という前提を否定しないと主張する。

円了は、禅が仏教の伝統の一部であり、それゆえに仏教教理において保持されている諸々の道理を含意し肯定しているという事実に着目することで、その批判に回答している。「余これに答えて曰く、禅宗は教外別伝、不立文字の宗旨なるも、あえてことごとく経論を排斥するにあらず、その直指人心、もって見性成仏するの理は、大乘諸宗の経論によりて証せざるべからず。『維摩経』『楞嚴経』『円覚経』『起信論』『原人論』等は、みなその宗の用うところなり。すでに経論を用うれば、必ず道理によらざるべからず。すでに道理によれば、これを哲学と称するも、あに不可ならんや」(IES 6: 281-282)。

この引用においては三つのことが言われている。

- ① 禅が教外別伝を要求するものであるとしても、そのことは伝統的な書物が退けられることを意味しない。
- ② 禅宗の別伝についての論証は伝統的な文献に見出されうる。
- ③ 諸々の道理を確定することは、禅の哲学を語るために必要十分な理由である。

要するに、教外別伝を喧伝するためにすでに、禅は言語と多くの言語的な諸々の道理に頼っている。たしかに、禅においては言語と諸々の道理が退けられるのであるが、しかし、この言語の拒否も言語を通して、諸々の道理に依拠してなされるのである。言語と諸々の道理の両者とも、弟子が教えを真に理解しているかどうかを判断することの役に立つ。換言すれば、仮に禅が諸々の道理と言語を放棄しまったく静寂の中で「心印」を伝えるならば、「人をして」表現するために言語を、熟考するために諸々の道理を用いないことの原因が何かを「知らしむるあたわず」(IES 6: 282)。「いやしくも [禅宗が] 道理に照見したるときは、必ず真非を判定せざるべからず。これ、禅宗に哲学を要するゆえんなり」(IES 6: 282)。換言すれば、よろしく「その教中に潜在せる真理を証明することを務むべし」(IES 6: 282)なのである。

禅における哲学的側面を最小限の輪郭で描くためには、その教説の「裏面」に含まれている諸々の哲理を示せば十分である。これらは、伝統において見出される諸々の哲理に対する単なる否定以上のものである。これにより円了は「なんぞ経論を要せんや」(IES 6: 304) という問いに返答する。彼は、とりわけ『楞伽経』、栄西の『興禅護国論』、あるいは東嶺の『宗門無尽灯論』といった禅宗の所依文献の中から回答した。例えば、円了は次のように述べる。「『楞伽経』に曰く、仏語、[...] 無門を法門となすと。本宗のごときは実に無門をもって門となすものなり。決して一経一論のよるところあるにあらず、すでに一経一論に偏依せざれば、一切の経論ことごとく所依とするも、またあえて妨げず。[...] これすなわち教外別伝の別伝たるゆえんなり」(IES 6: 304)。

換言すれば、聖典は直感的察知の対象あるいは絶対的真理の開示とはならない。しかしながら、禅宗は、諸聖典が相対的に真であるという信念によって、文献を自由に使用することを認める。それゆえ、これらの文献は禅の伝統あるいは伝承の一部となる。禅宗は伝統的な諸文献に含まれる本来の見識を否定せずに実践を最も強調する。他ならぬこの理由により、円了が述べるように、聖典の中に「教外別伝」の別伝があるのである。つまり、「我人すでにそのしかるゆえんを知らば、教外別伝の中におのずから経論の伝うべきあるを忘れず、不立文字の下にまたおのずから文字あるを記して、仏学の研修を怠るべからず」(IES 6: 304)。

にもかかわらず、禅宗の哲理と文字による伝承との関係は、特定の禅宗の書物における個々の言明を直接的あるいは間接的に解釈することを可能とすることに限定

されているわけではない。円了の再構築はさらに進展し、その結果、禅宗の教えはより理論的に方向付けられた諸宗派に直接関係することとなった。なぜならば、円了が彼自身の用語において説明しているように、「中道諸宗の理論を離れて別に禅宗の理論あるにあら」ざるがゆえに、「直指人心、見性成佛」は、「全く理宗の教義に基づ」くからである (IES 6: 304-305)。このようにして、円了は、禅宗の思想を哲学と直結させるのである。「中道諸宗の理論は純然たる哲学」 (IES 6: 305) であると円了は主張する。換言すれば、そのことは、特定の哲理が発見されうる伝統の中に、仏教を埋め込んでいる。円了はまた、「禅宗は理想哲学、ならびに唯心哲学の原理を実地に応用」 (IES 6: 306) するとも主張する。

本稿のテーマに戻れば、禅における哲学的な原理が見えてくれば、再帰的な叙述に相当する対象レベルが画定できる。なぜなら、円了に従えば、そこに見られる原理は単に外部から当てはめられた原理ではなく、禅の宗派自体が、伝統のテキストを利用していた時に扱っていたのと同じ原理だからである。

しかし、禅は、哲学と異なって、その原理の取り扱い方をテキストに制限せずに、実践、つまり修行まで延長する傾向があるのは間違いない。それ故に、禅の再帰性もテキストの範囲を超えているのではなかろうか。

#### 4. 禅の再帰的叙述のメタレベルは何であるか

しかしながら、禅の哲学的側面はこれに尽きない。禅は多くの仏教宗派の一つであるという見方は、仏教聖典における言葉のうちにある、また禅の哲理は禅の実践のうちにあるが、しかし、禅宗における書物の重要性を無視してはならない。もちろん禅宗は言語を否定的に使用し冗長な議論を避けている。しかしながら、禅における言語と、これに由来する哲学的諸原理とは、二つのレベルにおいて注目されるに値する。

ここで、対象レベルとメタレベルの違いをテキストの種類に基づいて、明確に出来ると思う。要するに、一つ目のテキストジャンルでは禅宗がその教の背景になる原理を表現し、また、二つ目のテキストジャンルでは禅宗がその様々な原理とその原理の間を反省し、その再帰的な叙述を表現する。

第一のレベル、即ちその再帰性対象レベルにおいては、特定の文献ジャンルの

発達が特筆されうる。これは、瞑想的実習を構築する役割を果たすものである。つまり、そのジャンルは公案を記録した公案集である。たとえば、碧巖録などはその公案集の一例である。円了はこれについて次のように述べる。「心門を打開して、真源を啓発するには、多少の階梯なかるべからず。すなわち古則公案の規則あり、端坐参禅の方法あり。けだし悟道の妙旨は義をもって解すべからず、言をもって伝うべからず、文をもって詮ずべからず、識をもってはかるべからずといえども、古人先哲の案牘によりて、悟道の跡を明らかにするを要す。これを古則公案という」(IES 6: 306)。約 1700 節を備えた公案集を解釈することによって、教学的宗派の諸原理が禅の中にはたらいっていることを確証しうる。これらの公案において表現されている諸原理は、禅にとって言語が極めて重要であることを示す。

第二のレベルにおいて、われわれは禅文献の中に再帰性と再帰的表現の、すなわち公案実践のメタ理論的分類の、それ独自の形態を見出すことができる。換言すれば、覚りの経験とさらには覚りのはずみ、または、勢い・推進力の後に進展する経験の内的世界（それは知性を圧倒する）を名指すことを助ける言語的表現と概念、そして叙述があるのである。ごくわずかの資料が禅宗の分類についての記述を取り上げている。<sup>4</sup>

特にこのメタレベルは多くの様々な例を包含するが、その諸例は日本において知られる禅宗の三派のうちの一つに特有のものである。牛が群れている絵の叙述を想起するかもしれない。円了は、とりわけ曹洞禅における洞山良价の五位と道元の身心脱落を扱う (IES 6: 306)。たとえば、道元の坐禅指南書である『普勸坐禅儀』は、内外の調御の説明、つまり対象のレベルにおける「身心」の準備を構成することにとどまらず、さらに不思量という原理について思量することによってメタレベルに没頭させる (IES 6: 308)。道元は、質素で適度な生活様式の重要性、あるいはその中で実践するところの部屋の選択といった冥想に関する数々の詳細を強調し、続いて、はなはだ精緻な結跏趺坐の指示を与える。

これに関係して円了は次のように述べる。「つぎに調心法を考うるに、『普勸坐禅儀』にこのことを掲げて、「身相既に調ひ〔中略〕兀々として坐定まるときに、箇の不思量底を思量す。不思量底の思量如何、曰く非思量なり」という。「これ禅家の用語にして、普通に解し難しといえども、けだし一切の心思識量を超過して、悪を思わず善を思わず、迷悟生死を離却し、安住不動の地に体達し、もろもろの言論を絶したる境界をいうならん」(IES 6: 308)。



もう一つの例を提出するためには、洞山五位にしたがった悟道の分類を考察するとよい。それらの名称は以下のとおりである。つまり、「直立の中の傾斜（正中偏）」、「傾斜の中の直立（偏中正）」、「直立から出ること（正中来）」、「傾斜への到着（偏中来）」、「[傾斜と直立の集合]への到着（兼中至）」である。メタレベルの再帰的表現を例示するのは、他ならぬこれらの区別である。なぜなら、禅宗ではその表現をもって、公案集の中で表現された原理を整理し、反省し、叙述するからである。このレベルは通常、哲学に、その主な性質として、帰属せしめられる。しかし禅宗の場合は、その再帰性は哲学と違って、実践に向いて実現する。

五位についての独特の見解について注目したい。三浦一舟老師はつぎのようなことを述べる。「五位は時に禅の哲学と言われている。しかしながら、先行する多くの公案を経たことの結果として我々が獲得している見解なしには、五位の深遠な意味を把握する準備が我々には整っていないだろう。知的能力は、祖師たちの智慧を理解することに何の関係もない」（62）。禅の実践的側面実践的側面を強調することは重要なように見えるものの、「知的能力」が「祖師たちの智慧」と関係がないと主張することは疑わしい。

本論文は、それが体系的に記述しているという理由によってではなく、禅の思想の基本原理をそれが再帰的に表現していることによって、五位が禅の哲学に極めて近接している、ということ論じるものである。

同時に、円了のアプローチは、仏教教学の諸原理に沿った、より哲学的な読解を導くものである。そのようにして彼自身は文献をさらに明瞭にする。「この意義は禅門最極向上の玄意を五段に分かちて示したるものにして、到底言語をもって説明すべからずといえども、その門にて解するところによるに、正位は空なり、偏位は色（事相）なり、空色は真性の異名なり、自性の本体廓然清浄にして、物の名付くべきなし、強いて名付けて正という。自性体中差別の法に従って物として現ぜざるなし、強いて名付けて偏という」（IES 6: 310）。

この一節の中において、一方で円了は可能な限り言語を避けるという禅の公式見解を繰り返すが、他方で状況に適合するように五位を表現し言い換える。つまり、五位はもはや有益な手段であるに過ぎない。しかし同時に五位は、言語によって介在されないものの、さらなる分析を認めることのない何かとしてただ直接的に禅の実践者がそれを通して生きる場所のものであるようなものを、きわだたせるための真なる手段である。しかし、より重要なことは、円了が、彼の五位の哲学的解釈を

仏教の伝統それ自身によって、そして禅の自己解釈の一部として確証しえた、という事実である。

円了は、諸原理を分類され伝統を反映したものとして配置する。「第一位正中偏とは、自性の本体平等坦々として、一物の面目を現ぜざるところに、臙然として万差の諸法を具し居るをいう。[...] 第二位偏中正とは、あたかも第一位正中偏の旨意を裏面より説きたるがごとくにして、偏位中に正位の理を具し居るをいう。[...] 第三位正中来とは、これ更に向上出身の一路にして、遠く言外に超出せる境遇なり。[...] この上更に兼中至、兼中到の二位ありて、一位ごとに段階を進めて玄奥の旨を説く」(IES 6: 310-311)。

言い換えれば、円了は哲学者としてその再帰的叙述を解釈する上で、更に新しいテキストに換えるのである。哲学の目標はテキストを制作することであるのに対して、禅宗はテキストを徹底し、テキストを突破し、それを超えるのである。

## 5. 禅の再帰性の境界線

禅の実践の核心には、公案の使用を通じてはたらく言語がある。一方ですでに示したように、別のレベルが依然として存在する。そのレベルとは、それを経過することで、公案の言語において表現される諸原理がそのような諸原理として分類され、表現されるようになるものである。円了に従って言えば、これらの諸原理は自ら哲学と呼ぶものを表す、と言ってよい。特に、その諸原理を体系的なやり方で考慮するならば、その哲学の性格が見えてくる。

さらに、メタレベルで分類するための、特有の手段を禅文献自体が提供するという事実に関して、その事実を二つの方向へ解釈することが出来る。

まず、一つ目のオプションとしては、禅そのものがある原理の実践をはるかに超えたものであり、むしろそれが哲学的体系でないとしても哲学的になっている、と最終的に主張してよいかもしれない。二つ目のオプションとしては、禅がその書籍を利用しながら、テキスト上に見えてくる再帰性を通して、テキストの範囲を超えて、再帰性を修行の範囲まで広げるといえるものである。

いずれにせよ、禅も哲学も再帰性を実現する限り、それは哲学と禅の接点についてのこれからの研究目標とする出発点になると言える。

注

<sup>1</sup> Chin. Jùshè, Chéngshí, Fǎxiàng, Sānlùn, Huāyán, and Tiāntái.

<sup>2</sup> GODART, Gerard CLINTON. “Tracing the circle of truth: Inoue Enryō on the history of philosophy and Buddhism”, in: *The Eastern Buddhist* vol. 36, 2004, p. 106–133. 引用箇所は p.125.

<sup>3</sup> 『禅宗哲学序論』哲学書院、1893年（『井上円了選集』第6巻 p.247–326 所収）

<sup>4</sup> Cf. Hori, G. Victor Sōgen: *Zen sand. The book of capping phrases for kōan practice*, University of Hawai'i Press, 2003, p. 19–27. および MIURA, ISSHŪ and SASAKI, Ruth FULLER: *Zen dust. The history of the koan and koan study in Rinzai (Lin-chi)*, Harcourt, 1966, p. 46–72.

（ミュラー、ラルフ：京都大学大学院文学研究科）